マングローブとその後背地植物を用いた宮古島の水辺緑化

宮古島環境クラブ
下地 邦輝

1．はじめに

宮古島における環境クラブの水環境保全活動は、1999年創立のおきなわ環境クラブ(OEC)宮古支部に始まり、2009年創立の宮古島環境クラブ(MEC)へ活動を引き継いだ。宮古島の水辺緑化は、島の自然・環境を学ぶ場づくり活動として、三つのフィールドを中心にマングローブとその後背地植物(バックマングローブ)を用いた緑化の実践と同時にプログラム＆教材の開発・実践を行ってきた。

今回はフィールドとこれまでの活動概要を紹介するとともに、その中でも「添道サガリバナ群生地」を取り上げ、宮古島における活動のこれからを展望したい。

2．三つのフィールド概要

1) 添道サガリバナ群生地：2001年度の農地基盤整備事業で赤土等汚濁の沈砂池が整備され、同時に左岸230mに遊歩道とサガリバナ並木が造成された。

2) 与那覇湾(川満ウプカー&漁港、サニツ浜東海岸)：川満漁港護岸にマングローブテラスを造成し、ヤエヤマヒルギを帯状に植樹。2009,10年にサニツ浜東海岸でヒルギダマシを植樹。2012年、与那覇湾はラムサール条約登録湿地へ。

3) ヤーバルやすらぎの森：旧下地町が造成した森林公園。広場にサガリバナ、防災池にケミズキンバイを植樹&移植。

3．宮古島の水辺緑化

宮古島に分布する4種(ヒルギダマシ、ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギ)について、島の胎生種子から実生苗を育てて与那覇湾岸へ移植。特に希少種のヒルギダマシは、埋め立てや土砂の堆積、種間関係等で島から消滅するリスクを回避した。

バックマングローブは主としてサガリバナを、他にゴバンノアシやサキシマスオウノキを用いて行った。

4．添道サガリバナ群生地の現状とこれから

ここのライトアップ「添道サガリバナ、夜のお花見」は2009年に始まり、コロナ禍の3年を除き今年で12回開催した。毎年6/25～7/4の10日間、毎晩の7:30～9:302時間ライトアップされる。地元住民と観光客が半々で毎晩500～600名の来場者があり、今や夏の風物詩として定着している。

今後は群生構内と周辺環境を維持管理する体制の確立と、ライトアップ期間中だけでなく一年を通した利活用が求められている。

5.「散策&交流」「学び&体験」「観光」の場づくり

環境クラブは宮古島三拠点を中心に「散策&交流」「学び&体験」「観光」の場づくり、そしてスタディツアーの拠点づくりを目指している。添道サガリバナ群生地では「サガリ花の園」づくりと同時に利活用を促進し、沈砂池のケミズキンバイ(絶滅危惧種)保護についても、これまで同様に活動を継続して行く計画である。

ラムサール条約登録湿地の与那覇湾(川満ウプカー&漁港とサニツ浜東海岸)のマングローブ、そしてヤーバルやすらぎの森(森林公園)で宮古島の原植生であるタブ゛林を観察&体感するなど、それぞれの特徴を活かしたスタディツアーの展開を計画している。

6. 今後の課題

「理解・認識があれば、私たち一人一人は行動する!」を前提として、宮古島における水辺の緑化活動は島の水環境保全に最適と考える。

環境クラブは宮古島三つのフィールド゛を「散策&交流」「学び&体験」「観光」の場として、そしてスタディツアーの拠点として活動を継続するとともに、三つの拠点の更なる利活用によって環境保全へつなげて行く計画である。